

農村の伝統的空間構成における自然

誌名	造園雑誌
ISSN	03877248
著者	藤井, 英二郎
巻/号	52巻3号
掲載ページ	p. 192-195
発行年月	1989年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農村の伝統的空間構成における自然

藤井 英二郎 *

Nature in the Traditional Rural Spaces

Eijiro FUJII

1. はじめに

ここでいう伝統的という言葉は日頃日常的に使う言葉ではあるが、その意味する内容となると必ずしも一定してはいないようである。伝統的という言葉と同じように使われる言葉として歴史的という言葉があり、伝統的と表現されている場合の中身を吟味するとむしろ歴史的といった方がよい場合もある。歴史的と形容される場合、多くは現代とは切り離されたものであるのに対して、伝統的といわれるものは今日まで、あるいは比較的長い間受け継がれてきたものをいうのであり、歴史的といわれるものとは大きく異なっていると言えよう。

伝統的という言葉を上述のようにとらえたとすれば、農村において古くから今日に至るまで、あるいは比較的長い間受け継がれてきた空間構成とはなにかということになる。これは、かなりの調査、研究を踏まえた上でないと明確には規定できない問題であるが、恐らくその伝統的と呼ばれる空間構成はすべてが同じように長い命をもって生き続けるのではなく、あるものは今日既に消滅してしまっ、われわれが目にするることさえできなくなっているものもあると思われる。また、あるものは今日まで脈々と生き続けているもののその形態は変化しているという場合もある。このように農村の伝統的空間構成とは言っても簡単に規定できるものでもなく、またそれを既成の概念として議論できるほど関連の研究が積み重ねられているわけでもない。

このような意味で、今回与えられた課題のなかで一つの重要な概念となっている伝統的空間構成を自明のものとしてここでの考察を始めるわけにはいかない。したがって、ここでは農村の伝統的空間構成そのものが一体どのようなとらえられるのかという議論も含めて、そうした空間構成の中で自然がどう位置付けられ、それがどのような特性を持っているのかについて考察を加えてみたい。

農村の伝統的空間構成における自然という場合の自然のとらえかたには様々の視点が考えられるが、ここではそれを次の2つの視点からとらえてみたい。ひとつは、人が農村空間を構成する以前の素地としての自然であり、ここではそれをひとつの集落がある場所にその位置を定める場合の自然のとらえかたに絞って考察することとする。これに対して、もうひとつは集落空間が定まった後の自然であり、それは上記の素地としての自然と深く係わりはあるものの、それと同じものではない。なお、ここで言う自然は人手の加わらない状態の自然だけを指すのではなく、人為的環境の中にみられる自然の僅かな営みをもそのひとつとしてとらえている。

2. 集落の伝統的空間構成と自然

1) 集落の立地

ある地域に分布する幾つかの集落についてその成立の順序、あるいはある集落の変遷をみると、ある地域に人が定住する場合の場所の選び方を推測することができる。一般には山や丘陵を北側にし、西側、東側にもその一部が広がって地形的な囲いをつくり、南側が開けた土地であって、しかも水の得やすい所が最も早くから定住地となったようである。それは、北側および西側、東側に広がる地形的囲いによって寒風を防ぐと同時にそこに暖気を保つ場所である。そこはまた、一か所だけが外に開きその他は閉鎖された、いわゆる圍繞空間を地形的に形づくっており、心理的な安息空間ともなっている。

こうした土地を選ぶことのできない集落は、多くの場合低地や台地上に位置することになる。そのとき水の得にくい台地は一般に低地に比べて集落の展開はより遅れたようである。しかし、低地は水が得やすい一方で浸水の危険性も高いわけで、定住地としては周辺に比べて少しでも高い土地を選ぶ必要がある。こうした土地としてよく利用されているのが、自然堤防上である。しかし、

* 千葉大学園芸学部環境緑地学科

たとえこうした場所であっても今日に比べるとはるかに水害の危険性は高かったわけで、その被害を僅かでも軽減するために、多くの労力をかけて土を盛り地盤を嵩上げて定住することも多くみられた。

低地の定住適地に集落が広がり、そのような土地も少なくなると、集落は台地上に展開する。ここでは水が得にくいことから台地の端にあって、低地に下り易く水の得やすいところに集落が展開することが多い。

このような平地集落では、前述のような自然地形によって形づくられた安息空間を期待することはできない、周囲に障害物も少ないことから風当たりも強い。そこで、これらの集落では囲繞空間を人為的に形づくる場合が多い。その代表的な例として挙げられるのが屋敷林であり、一戸一戸の屋敷林が連続して集落全体を包むような「集落林」を形成しているところもある。¹⁾

農業をはじめとする第一次産業は自然条件により大きく規定されており、したがってそれを生業の中心とする広義の農村集落においては、上述のようにその立地選定もまた自然条件に即し、それを活かしたものとなっていたと言えよう。そこでの自然のとらえかたをみると、今日のように大規模な土木機械によって自然地形を大きく改変することができなかつたこともあって、今日の人間では識別できないような微妙な地形的特徴を適格にとらえていることがわかる。また、そうした自然の活用の仕方、その技術が自然材料を使い、その規模も比較的小さいものが多かったことから、今日に比べてはるかに自然に即したものになっていたと言えよう。

2) 集落空間の構成

伝統的集落の空間構成を模式化すれば、それは集落の内側からムラ、ノラ、ヤマという3つの領域から成っているとされる。²⁾ムラは主として居住域であり、ノラ、ヤマはそれぞれ耕作域、山林域である。これらはよく言われるように土地利用の集約度の序列に従った配置であり、生産や生活を基本とした配置と考えるとよいであろう。しかし、実際はそのような模式的構成の見られる集落は極めて少なく、それぞれの集落の置かれている自然条件によってヤマがノラに隣接する集落や、ノラの中にヤマが散在する集落もごく一般的にみられるのである。これらには、また土地所有の問題がより大きく係わることもある。従って、農村集落の空間構成は生産や生活のために原則的には利用頻度の高いノラがムラの外側に広がり、さらにその外側にヤマが広がる形となるが、実際の配置は自然条件や社会的条件によって大きく左右されるものと言えよう。

ヤマは林地であり、木材生産の場であるとともに燃料や肥料などの供給地でもある。また、ヤマはノラやムラへ供給する水を涵養する上でも重要な役割を果たしてきた。このような意味で、ヤマは農村における生産や生活

を物質的に支えてきたものと言ってもよいであろう。一方、ヤマは多くの場合その位置が地形的に高いところにあり、またたとえ平地にあってはその樹高が高いことから、村の領域を視覚的に形づくり、ひとつのまとまりのある景観を構成する上でも大きな役割を果たしている場合が多い。さらに、ヤマは村の中において最も自然性の高い地域であることが多く、ノラやムラに比べてより神聖な場所として意識されていたようである。これらのことから、ヤマは物質的にも心理的にも、村を形づくる大きな骨格を成してきたものと理解してよいであろう。

ノラは、農業生産の場であり、人がその場の自然に手を加えて生産に適した状態をつくりだしたものである。従って、そこには作用と反作用を繰り返す、自然と人間の双方の営みとともに、そのバランスの中で成立してきた人為的自然や人為的景観を見ることが出来る。それはヤマにおいても同様であるが、ノラでは自然に対する人の働きかけがヤマに比べてより大きく、また頻繁であるため、自然と人との作用と反作用の繰り返しがより明らかである。そこでの自然は農業生産を支えるものである一方、農業生産に制約を加えるものでもある。したがって、ノラは農家の人々がそれを認識していたか否かは別として、生産活動を通して自然と直接的に交流し、接触してきた中心的な場所と言えよう。

ムラは、主として村の居住域であるが、同時に農作業の場でもある。居住域としてその空間は村の中で最も人手の加わった場所であるが、農村という性格上当然のことながら都市の居住域に比べてはるかにその自然性は高い。しかし、その自然はヤマやノラの自然とは異なり、より人為的な環境の中にあるということと同時に、人々がより日常的に接触する自然でもある。したがって、その自然はそこに生活する人の心情や社会的関係をも反映するため、ヤマやノラの自然に比べてはるかに人為的な自然であると言えよう。

このように農村集落の伝統的空間構成における自然は、居住域であるムラからノラ、ヤマと集落の外側に向かうにつれて自然性を増す形となっているとともに、それらの自然はそれぞれに独自の特性をもっていると言えよう。すなわち、ヤマの自然は物的、心理的の両面において村の空間をかたちづくるうえでその骨格となり、またよりどころとなっている。ノラの自然は人々が生産活動を通して直接的に接触し、交流してきた自然であり、その過程の中で維持されてきた人為的自然である。ムラの自然は、これらに対してより人為的な環境にあり、またより日常的に接触する自然である。したがって、その自然にはそこに生活する人々の心情や社会的関係が色濃く反映していることが多い。

3. 農家の伝統的空間構成と自然

1) 庭

農家の庭は生活の場であると同時に農作業の場でもあることは良く指摘されることである。したがって、その空間は実用本位に構成されていることが多い。その庭は屋敷内に占める母屋の位置によって大きく規定され、一般には母屋を中心にして南庭、東庭、西庭、北庭の4つに区分できる。

南庭は良く日が当たることから様々な農作業の場として最も良く使われる場所である。しかも、農家では母屋が南面し南庭に向けて玄関を設えることが多く、また屋敷入口も南庭近くに開かれることが多いことから、南庭が表向き、すなわちハレの空間になることが多い。したがって、そこには農作業のための広庭を確保しながら、その作業に差し支えない範囲で装飾的な植栽がみられることが多い。それは一般にふたつの区域に分けられ、そのひとつは玄関近くであり、もうひとつは屋敷入口の周辺である。どちらの植栽もその視点は主に屋敷の外から内に向かってのものであり、内側すなわち母屋からの視線を考慮した植栽はそれほど多くはない。それは、従って人ないしは人の視線を屋敷内に迎え入れることを意識したものと言えるのであり、その植栽はそこに住む人の心を癒すものであると同時に社会的な意味合いをも合わせ持った自然と言うことができよう。

それに対して同じ南庭にあってもその西側、東側によった所の構成はやや異なっている。それは農家によって多少異なるが、多くの場合母屋の東寄りに勝手があることから、その付近の庭には日常良く使う野菜を栽培したり、畑から取ってきた野菜を仮植したりしておく菜園がよく見られる。したがって、そこは表向きの空間としての南庭にあってはやや内向きの性格を帯びた空間と言うことができるであろう。そしてこの性格はそれからさらに奥に続く東庭においてより一層強くなる。このように見てくると、この一角は庭の中にあって最も耕地すなわちノラに近い性格を有しているとも言えよう。

一方、南庭の西寄りの空間は、建物の中で主として接客空間として使われる座敷と呼ばれる部屋に面することが多いことから、そこから眺める庭としての性格を帯びることが多いようである。そして、さらに農作業空間としての制約をあまり受けることのない西庭では観賞本位の空間となる可能性をより多くもっている。主に名主や庄屋のような階層で見られたいわゆる造り庭はこうした背景の中で成立したものとも言えよう。また、それ以外の多くの農家では造り庭とまでは行かないものの、そうした使い方を感じさせるような空間が存在していたものと考えられる。従って、この一角は農家の庭の中では最も生産との係わりの薄い所である一方、母屋との関係においてはある意味で最も深く係わった空間であるとも言え

よう。

北庭は南の表庭に対する裏庭であり、庭の中では最も内向きな空間と言えよう。そこには多くの場合比較的厚みのある屋敷林があり、庭の中では最も自然的な空間である。この屋敷林は防風機能を持つとともに木材や燃料を供給する場所でもあって、集落空間におけるヤマと同様に農家空間を形作る骨格のひとつであり、また抛り所となっている。また、北庭は母屋や屋敷林の陰になって冷涼な所であることから農産物を仮置きし保存するなどの独自の役割をもっている。

このように、母屋の東西南北に展開する庭はそれぞれに特徴的な使い方がみられ、またそれぞれに独自の形態を持っている。南庭は農作業の場であると同時に慰楽的、社会的な意味合いをも持ち、西庭では後者の意味合いがより一層濃くなる傾向がある。南庭と西庭がこのように表向きのハレの性格を帯びるのに対して、東庭と北庭はより内向きな空間であり、ケの性格を帯びている。すなわち、東庭はやや耕地に近い性格を有しており、北庭は表から見えない最も内向きな空間である。北庭はそうした性格と合わせてその屋敷林によって集落におけるヤマと同様より自然的な空間ともなっている。したがって、農家の庭は居住域として慰楽的、社会的な意味をもった空間である一方、そこにはノラやヤマの要素が入り込んでいるのであり、ムラ、ノラ、ヤマから成る集落空間の縮図とも言えるのである。

2) 屋敷囲い

農家の屋敷が前述の山壇と言われるような場所に位置する場合、人為的につくる屋敷囲いはそうした地形的囲いのない部分だけで、その多くは南側である。このような立地条件の土地では母屋の南側に十分に広い庭を確保できないことが多いことから、その庭に十分な日を当てるためには南側の屋敷囲いは低いものでなければならない。従って、そうした山がちな所に位置する屋敷の多くは、特に南からの風が強くないかぎり比較的開放的な囲いが多いのである。また、当然のことながら雪の多い地方では防雪機能をもつ屋敷囲いを除いて除雪の邪魔になるような囲いはほとんど見られない。

平地に位置する農家の屋敷囲いは、居住密度が比較的低い土地利用の集約度もそれほど高くない地域ではほぼ四方を囲む形の屋敷林であることが多い。ただし、その厚みは一律でなく一般に北側の囲いは他に比べて厚いことが多い。それは、北側の屋敷林が冬の北風を防ぐと同時にそれが南庭や母屋への日差しを遮ることがないからでもある。いずれにしてもこのような原初的な屋敷囲いは、後述するような社会的な意味合いをも合わせもつことは少なく、むしろ屋敷の外側に広がる自然と屋敷との境界にあって屋敷という人為的空間を形づくるものとも言えよう。その意味でこのような屋敷林は人為的空間とし

ての屋敷とその外側に広がるノラやヤマの自然との接点とすることができるであろう。

居住密度が高まるとともに樹高が高くその陰を広く落とす屋敷林は成立しにくくなり、より集約的な屋敷囲いとなる。その形態は様々であるが、一般的にはそれが高垣状のものとなり、さらには通常見られる低い生垣となる。このような集約的囲いは主として上述のような物的理由にはじまるが、それとともに隣家との距離も近くなり、人の往来もより多くなることから、社会的な意味合いをより多く持つようになる。したがって、このようなより集約的な囲いは屋敷の外の自然と屋敷との接点というよりは、その家と他の家との接点であり、それはどちらかという社会的な接点とすることができよう。したがって、それは単に境界という物的な機能だけでなく、装飾的な意味合いをも合わせ持つようになる。

4. おわりに

農村の伝統的空間構成を集落と家のレベルに分けて考察してきたが、それら二つのレベルの空間を構成する要素、例えば集落空間ではヤマやノラ、ムラなどがそれぞれに独自の自然的特徴をもつと同時に、それらをつくり、維持してきた農村の人々にとってもそれらがそれぞれに独自の意味をもつ自然であると言うことができよう。その意味は、ひとつに農村空間の基盤や土台としての自然であり、また農村空間を形づくる骨組みとしての自然である。そうした比較的安定した自然の中であって、相対的により頻繁に変化する自然としてとらえられるのが、集落レベルではノラであり、また家レベルでは庭の自然である。ノラの自然は農村の人々が農耕を通して肉体的に接する自然であり、また庭の自然は農作業とともに日常生活における慰楽や社会的関係のなかで生まれ育ってきたもので、心理的、社会的意味合いをも合わせ持ったものと言えよう。

引用文献

- 1) 藤井英二郎・細田和寿(1983)農村空間の構造と特性に関する研究—列状集落の都市化に伴う変化、千葉大園学報31, 73—80
- 2) 福田アジオ(1980)村落領域論、武蔵大人文学誌12(2), 217～247

(P191よりつづく)

- 85) 横山光雄：新都市の緑地計画、公園緑地 22(2,3), 4—10, 1960b
- 86) 横山光雄：都市と緑地、都市問題研究 17(5), 3—4, 1965
- 87) 横山光雄：近郊緑地のあり方、新都市 20(9), 2—4, 1966
- 88) 横山光雄：広域土地利用計画における生態学的秩序、地域開発 79, 1971